

目次

- ・ 1997年度日本図書館文化史研究会 第14回研究集会報告
- ・ 1997年度日本図書館文化史研究会 総会 報告及び議案
- ・ 〔資料：要望書〕京都市立図書館の保存について
- ・ 研究例会・運営委員会のお知らせ

1997年度日本図書館文化史研究会 第14回研究集会・総会報告

1997年度の研究集会・総会が9月14日（日）から15日（月）にかけて、立教大学において開催されました。テーマは、“私にとって図書館文化史とは”、その概要は次のとおりです。

<1日目>テーマ：“私にとって図書館文化史とは”

問題提起

問題提起にかえて 日本公共図書館研究を中心に

山口源治郎

（東京学芸大学）

先の『図書館情報学ハンドブック』（1988）に述べた日本公共図書館史研究の問題点にふれ、その後の展開、そして現在の研究課題を整理した。転換期にさしかかる現代図書館にとって、新しい図書館像を創出するためには歴史研究が必要であり、鮮明な問題意識が求められている。そのため時代区分の検討、基本概念の明確化、分析する枠組みや研究領域の再構築、さらには新しい資料の発掘などにより研究の基盤を広げる努力が必要になっていると問題提起した。

発表1（ドイツ図書館学研究者の立場から）

私にとって図書館文化史とは

河井 弘志

（立教大学）

「図書館文化史」とは何か、との観点から、①図書館史のひろがり（これまでの研究を概観、問題意識の多様化にふれる）、②文化の概念（文明の概念との差異など）、③文化史の領域（文化史の位置づけはどうあるべきか）、④図書館文化史とは（現状と要件）について論じた。④では、これからの図書館文化史研究を展望し、図書館史の専門性を踏まえながら、関連する書物・情報技術の歴史をどうとらえる

か。また、読書の歴史、文化史のなかの図書館史をどう描くか、などの課題が山積しているとした。

発表2 (公共図書館員の立場から)

ネットワークの形成 - 神奈川の図書館現場にいて -

池田 政弘
(神奈川県立図書館)

神奈川県図書館協会の発足から、戦前・戦後の活動を概説し、とくに県内図書館のネットワーク化の変遷の意義を検討した。神奈川県立図書館を中心とするネットワークは、市立図書館との組織づくりのなかで直接サービスから間接へとサービス内容が移行、またコンピュータ時代の到来により近年は情報主導型に転換した。戦前の文化統制、情報化社会における図書館の役割などにおいて、文化史的な側面からの視点が図書館の現在、将来を展望する上に求められるとした。

発表3 (図書館学研究者の立場から)

私にとって図書館文化史とは

岩猿 敏生

個々の図書館を並べ記述しても、歴史的な流れは見えず、年代記の域を出ない。そのためには、図書館の背景にある文化的な現象を構成すること。したがって、図書館の歴史が成立するためには、〈図書館文化〉の歴史的研究でなければならず、いま「図書館文化史」を研究対象として構成する力量が問われていると論じた。

「時代区分」の認識が、歴史意識と不可分であること。また、図書文化なくして図書館文化はありえない。にもかかわらず、これまではこれらを総合的にとらえる学問的な視点を欠いていたことなどについて言及した。また、この研究分野は、門戸を広げたアマチュアリズムが必要であるとも指摘した。

このあと、発表者に対し、質疑および活発な意見が行われた。最後に岩猿敏生が、総括した。

<2日目>自由発表

発表4 大学図書館の近代化とはなんだったのか

松野 高德
(椋山女学園大学図書館)

この報告では、大学図書館の近代化を1960年代以降と規定して、東大図書館に岸本英夫館長が誕生した(1960年4月)後の活動をまとめた。東大などの大学にロックフェラー財団の資金援助があり、図書館建築、資料費、職員研修などに充当されたことが近代化の要因としてあげられること。近代化によって、学生への貸出の実施、開架図書の拡大など利用者サービスの視点が取り入れられたが、それは図書館報の発行の状況にもあらわれているとした。

発表5 『ハックルベリーフィンの冒険』とアメリカの図書館界

伊香左和子

(大谷女子大学)

マーク・トウェイン『ハックルベリーフィンの冒険』の児童書としての側面について、その出版から現代に至るまで、アメリカの児童・学校図書館における評価の変遷を辿った。同作品は、1885年の出版から50年以上にわたり「道徳水準の低さ」「粗野な表現」による児童に対する悪影響を理由に児童図書館から閉め出された。その後評価が確立し、学校などの推薦図書にも載った。しかし、50年代の公民権運動の高まりにより、黒人に対する差別意識を助長する作品との批判を受けた。児童書に求められるものは時代によって異なり、選定も時代の流れを反映しているとした。

発表6 図書館史教育の方法に関する考察

－図書館史概説書の比較を中心に－

小田 光宏

(図書館経営研究所)

「JLA図書館情報学テキストシリーズ」(98年3月刊予)のなかに『図書及び図書館史』刊行の計画がある。ここでは、これまでの司書講習科目の変遷にそって、「図書及び図書館史」の位置づけを検討し、図書館史教育の環境の変化を考察した。また、いくつかの概説書を取り上げ、それらの内容について特徴と問題点を指摘した。新しいテキストには、学習者の理解を助ける配慮や教授方法との関係が考慮されるなど工夫が求められるとした。

発表7 屈指の理論家 渋谷国忠

石井 敦

渋谷国忠(1906-69)は、1928年横浜市図書館に就職、43年には前橋市立図書館長に就任、66年に退職した。渋谷は戦前には、読書指導の概念をめぐる中田邦造を批判、戦後は図書館法改正について発言する際(58年)、市立以上の義務設置に賛成するなど独自の理論を展開した図書館人として知られている。ここでは鈴木保太郎横浜市図書館長時代(1934-39年)の影響、戦後の混乱期における前橋市民大学の開講、市立図書館での勤労青年文庫、家庭文庫などの実践をとおして、渋谷が民衆の自己教育の場としての図書館理論を形成した過程を論じた。

チャットコーナー

河井弘志が、京都府立図書館の保存の必要性について説明(「京の近代建築守り伝えよう」(『京都新聞』96.11.12)などの資料を配布)、会員の理解を求めた。その上で会として何らかの行動が起こせないか、と提起した。京都在住(勤)の会員からの情報提供もあり(阪田蓉子、石井敬三)、改築計画の進捗状況から見ても早急に取り組む必要があることが確認され、総会にはかることになった。

また、第1日目終了後、懇親会(池袋)が行われ、22名が参加した。

参加者（第1日目 36名、2日目 20名、延べ39名）

伊香左和子、池田政弘、石井 敦、石井敬三、岩猿敏生、上野 一、宇治郷毅、大和博幸、小川 徹、奥泉和久、小黒浩司、小田光宏、加藤三郎、河井弘志、石塚栄二、後藤純郎、阪田蓉子、嵯峨山あかね、佐藤貴虎、佐藤毅彦、塩田一徳、須藤美奈子、塚原 博、寺田光孝、長倉美恵子、中林隆明、浪江 虔、原 淳之、藤野幸雄、榎得幸彦、松野高德、三浦太郎、宮崎真紀子、宮部頼子、校條善夫、山口源治郎、油井澄子、横山道子、若松昭子（五十音順）

司会：（1日目）小黒浩司（2日目）奥泉和久
研究集会・総会事務局：中林隆明、宇治郷毅

（記録：事務局）

1997年度日本図書館文化史研究会 総会 報告及び議案

<報告>

1. 1996年度活動報告

- ①第13回「日本図書館文化史研究会研究集会・総会」の開催
1996年7月13日（土）-14（日）の両日にわたり開催。会場は大阪府立大学学術交流会館。
- ②機関誌『図書館文化史研究』No.13（1996）編集・刊行
- ③「ニューズレター」の編集・刊行
No.56(96.5.15) No.57(96.8.15) No.58(96.11.21) No.59(97.2.10)
- ④研究例会
第3回（96年度第1回） 96. 9.28 法政大学 発表者：大庭一郎、横山道子
第4回（96年度第2回） 96.12.21 法政大学 発表者：大野亜希世、小黒浩司
第5回（96年度第3回） 97. 3. 8 法政大学 発表者：伊香左和子、稲村徹元
- ⑤運営委員会の開催
第1回（96.7.14）第2回（96.9.28）第3回（96.12.21）第4回（97.3.8）
- ⑥その他
現在の会員数：129名（97.9.1現在、「ニューズレター」No.60付録を参照）
会費納入状況：96年度会費納入者129名（97.9.1現在）、97年度会費納入者59名

なお、最近3年以上にわたる会費未納者については、名簿から削除、整理した。
本年度の新加入者は6名である（97年9.1現在）。

1996会計年度（1996.4-97.3）決算報告

収入の部

前年度繰越金		775,061
内訳 郵便普通預金	748,061	
郵便振替	27,000	
郵便貯金元加利子		940
会費		394,000
内訳 94年度 (1人)	3,000	
95年度 (14人)	42,000	
95年度不足分 (1人)	1,000	
96年度 (112人)	336,000	
97年度 (4人)	12,000	
合計		1,1170,001円

支出の部

事務局費等	24,420
ニューズレター (No.56-59)	76,900
機関誌刊行費用等 (No.12-13、(注)参照)	406,116
研究会運営費用	
研究集会・総会 (第13回大阪セミナー)	17,581
積立金 (20周年記念事業準備金)	300,000
次年度への繰越金	344,984
合計	1,170,001円

(注) 『図書館史研究 12号』及び『図書館文化史研究 13号』
上記の編集刊行費(抜刷代を含む)及び買取代金等

〔特別会計：20周年記念事業積立金〕

前年度繰越金	0
積立金	300,000
合計	300,000円

監査報告

1996年度の監査の結果、帳簿の記入、事務処理が適正におこなわれていたことを報告します。

1997年6月5日

監査 池田 政弘〔印〕
塩田 一徳〔印〕

◇ 1996年度の活動報告・決算報告について、上記のとおり承認された。

<議案>

2. 1997年度(97.4-98.3)活動計画(案)

- ①機関誌『図書館文化史研究』No.14(1997)の編集・刊行(1997年8月刊行)
- ②「ニューズレター」の編集・発行(No.60-63の年4回を予定)
- ③第14回「日本図書館文化史研究集会・総会」(東京)の開催
- ④研究例会の開催(年3回程度を予定)
- ⑤運営委員会の開催(年4回程度)
- ⑥その他

1997年度(97.4-98.3)予算(案)

収入の部

費目	金額	備考
会費	360,000	97年度 3,000×120
雑費(利息)	400	郵便貯金・元加利子
前年度繰越金	344,984	
合計	705,384円	

支出の部

費目	金額	備考
事務局費	50,000	
会議費	10,000	弁当代、会場使用料等
消耗品費	10,000	文具、用紙、コピー代等
通信費	20,000	郵便切手、宅配料等
交通費	10,000	

会報(ニューズレター)発行費用 90,000

編集発行費	40,000	年4回(含・会員名簿等)
郵送料	50,000	同上

機関誌(図書館文化史研究会)刊行費用 245,000

編集費	70,000	No.14の入力作業
発行費用	250,000	No.14の買取費用
郵送料	52,000	委託送料
抜刷費用	30,000	印刷(日外)、製本、発送(事務局)
研究会運営費用	26,000	
研究集会・総会	10,000	第14回研究集会(東京)関係費
研究例会	6,000	年3回
運営委員会	10,000	年4回

特別会計への繰入	200,000	記念事業準備金 (1982-2002)
予備費	94,384	
合計	705,384円	

〔特別会計：20周年記念事業積立金〕

1996年度繰越金	300,000
1997年度積立金	200,000
合計	500,000

◇ 1997年度の活動計画（案）、予算（案）について、上記のとおり承認された。

3. その他

①次期事務局の移行について

1998年3月で現在の事務局長および運営委員の任期が切れる。事務局の交替について、運営委員会で検討した結果、しばらく東京地区（図書館情報大、東京学芸大、そして国立国会図書館）がつづいたので、会の性格からも次期は関西地区に置くことが望ましいのではないかと中林事務局長から説明があった。

②京都府立図書館の保存について

チャット・コーナーでの河井氏の問題提起を受けて、京都府立図書館の保存について総会に諮ったところ、京都府知事及び府当局者並びに報道機関等に「要望書」を送付することが決議された。「要望書」の内容については、事務局に一任された（「要望書」は〔資料〕のとおり）。

1997年度第4回運営委員会のお知らせ

下記のとおり運営委員会を開催いたします。

記

日時：12月21日 3時～4時（予定、研究例会終了後）

場所：研究例会の会場に同じ

〔資料：要望書〕

平成9年9月15日

京都府知事
荒巻 禎一 殿

日本図書館文化史研究会
代表 小川 徹
(法政大学教授)

京都府立図書館の保存について（要望）

謹啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃の文化、教育面におけるご尽力に対し深い敬意を表します。

さて、この度私ども日本図書館文化史研究会は、図書館文化について研究を行っている立場から、現在の京都府立図書館を古都京都の歴史的建造物の一つとして保存し、新京都府立図書館は別の適切な場所に建設されるよう要望致します。

現在の京都府立図書館は、米国シカゴ大学で図書館学を学び、日本の近代公共図書館の発展に多大な貢献をした湯浅吉郎館長の時、京都帝国大学教授武田五一が設計したフランス・ルネッサンス様式の優雅な近代建築として、明治42年に誕生しました。言わば、日本の近代公共図書館の理念と近代建築の美を結合して生まれたのがこの図書館です。

昭和14年に京都を訪れた、元米国図書館協会会長ポストウィック（A. E.）は、この図書館のことを “ the Library, one of a fine group of municipal buildings ” と記しています。

このように京都府立図書館は、日本の公共図書館サービスの歴史を目に見える形で残しているモニュメントであり、近代建築の貴重な遺産でもあります。この府立図書館が新府立図書館の建設計画により消滅しようとしていることは、図書館文化の歴史を研究し、文化財の保存を願う私たちにとって誠に遺憾なことであります。さらに、京都府立図書館の新築を要望する府民グループも、中途半端な改築では府立図書館の機能が低下するのではないかと懸念しております。

また、今回の改築計画は、近年全国的に広がっている図書館等の文化財的意義を有する建造物保存の動きに逆行するものであります。例えば、国の重要文化財として指定された大阪府立中之島図書館が保存されることになり、東京では上野にある元の帝国図書館（現在の国立国会図書館支部上野図書館）が原形を保存しつつ改修され、国際子ども図書館として再生されようとしております。

日本図書館文化史研究会は、本年9月14日及び15日、東京の立教大学で開催された研究集会・総会において、この問題について真剣に討議した結果、現在の京都府立図書館は保存し、新京都府立図書館を別の場所に建設されるよう、貴職に要望することにした次第です。

日本文化のメッカである京都府が、悔いを千載に残すことにならないためにも、現在の改築計画をご再考下さいますよう、お願い申し上げます。 敬具

京都府教育委員会委員長森田嘉一、京都府教育長安原道夫の両氏にも同文の「要望書」を送付し、また、報道機関等にも上記文書を送付しました。

なお、京都在住・在勤の会員は、同日この旨を報告しました。

原稿募集

- ◇ 『図書館文化史研究』15号（1998年9月刊行予定）の原稿を募集します。原稿の締切は98年3月末日です。投稿を予定される方は、下記までご一報下さい。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。

問合わせ、並びに原稿の送付先

小黑 浩司

- ◇ 「ニューズレター」の原稿も募集しています。研究に関する情報、書評なんでも結構です。（できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を）事務局あてお送りください。

会員名簿訂正

ニューズレター61号（1997.08.20）

研究例会のお知らせ（関東地区）

◇1997年度第2回

日時：1997年12月21日（日）午後1時～3時（予定）

場所：法政大学 92年館（大学院） 7F 701教室

発表：後藤純郎：市川清流の生涯－新資料による－

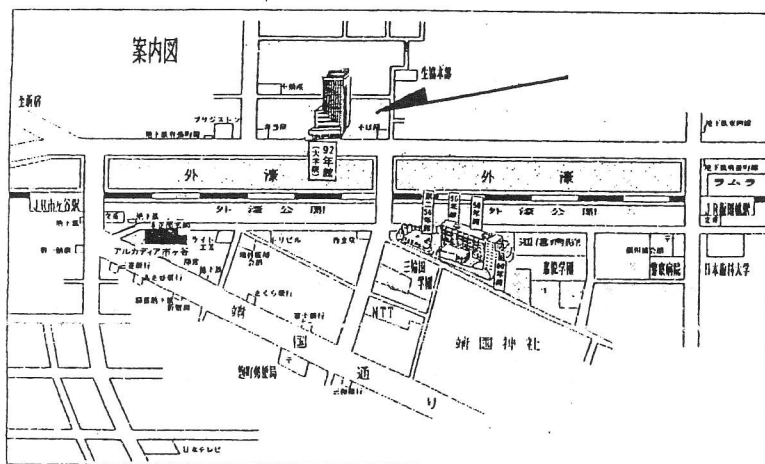
山口源治郎：『図書館文化史研究 第14号』合評
－日本関係を中心にして－

* 当日は、『図書館文化史研究 第14号』をご用意ください。

今後の予定

◇1997年度第3回 1998年3月 未定

* 例会の発表者を募集しています。質疑を含めて40分程度です。中間報告的なもの、情報交流（提供）などでも結構です。申し込みは事務局まで。



日本図書館文化史研究会 事務局 中林隆明